
その勇者、虚ろにつき

パイルバンカー串田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その勇者、虚ろにつき

【Nコード】

N7248Z

【作者名】

パイルバンカー串田

【あらすじ】

「勇者に願うな。

勇者にすぎるな。

勇者に頼るな。

世界を救いたければ、そうしろ」

召喚（前書き）

ぬるくない反逆系勇者を書いてみたらこうなった。なぜだ。

召喚

「主文、被告××××は……」

音が聞こえる。

「判決……」

特に理解した所で、意味の無い、音だ。

「……刑」

こんなものに、意味は無い。

「……死……」

僕にも、意味は無い。

「……ここは、どこなんだ」

気がつけば、男は奇妙な部屋の中にいた。

今どき珍しい石造りの壁や床、やや不純物が入りこむガラス窓。

そして、床に描かれているのは今まで見たことのない種類の文字と幾何学紋様の羅列。円を基軸としたその配置は、ドラマや漫画で

見たいわゆる「魔法陣」を彷彿とさせる。

「……君、たちは」

周囲には、屈強な男達。だが纏うのは洋服ではなく中世西洋の全身甲冑だ。

目の前には、やや低めの背丈の肥満体の中年がいた。

巻き毛の金髪に頂くは豪華な王冠、盛大に生える髭、太い指にはめられる、菱形の輝く指輪、堂々とした態度と気風はその男が幼少より人を下として扱うものとして育てられた事を示す。

現代日本で育った彼でも、その王冠の男がおよそ「王」であることは予感できた。

「よくぞこの世界に参られたッ！ 我らが勇者よッ！」

高らかに、王らしき男は叫んだ。

彼は、無表情にそれを見ていた。

「——故に、あなたは勇者なのだ」

広大な大広間、巨大なテーブルで王が喋る。並べられるは、何か種類はわからぬが贅を尽くしたとわかる無数の料理と酒、豪華な燭台。子豚らしき丸焼き、大魚のパイ包み、とにかく手がかかりそうな料理の数々。

王らしき男は、やはり王だった。

最初にいた部屋から通された広間で、彼の質問などする暇もなく事の経緯を話し始めた。

王いわく、この世界は魔王という存在に侵略されているという。
魔王は手強く、現在の戦力では勝てる見込みがない。それゆえに
古来より王族に伝わる「勇者召喚」の魔術により他の世界から人間
を呼び寄せ、魔王と戦わせることにしたのだ。

勇者召喚の魔術で召喚された他世界の勇者は、魔術によって強化
され最強の兵士となる。この力を持って魔王を討つのだ。

長々と弁舌を唱え、王は喉の渇きを葡萄酒で潤す。二、三度の咳
払いの後、さらに喋り出した。

「さあ、勇者よ、どうか我らの願いを聞き、正しき勇者の力を示し
てはくれぬか！」

魔術、召喚、フィクションの世界だけの言葉に、彼も少々面食ら
った。だが今、目の前の現実のみが全てだ。少なくとも今の彼を騙
して得をする者など一人もない。

ここが異世界であろうと、結局の所、彼は彼のやり方をしていく
しかない。

「どんな方がくるか正直不安でしたけれど、勇者様は意外と優しそ
うなお顔をしているんですね」

鈴の音のような声が、王の傍らの席から響く。

年は十七、八ほど。折れそう程に華奢な腰が、細い肩と首筋へ連
なる。纏うは絹のドレス、裾が大きく広がり、下半身を隠す。輝く
ティアラをつけられた長い金髪、ガラス細工のように整った容貌。
人の美醜に疎い彼でも、少女が美人だと思った。この王の娘、つ
まり姫だという。

「魔王に打ち勝つ人というから、どんな恐ろしい方かと思いました

けれど、安心いたしました」

少女の笑顔は、まるで花が咲くように輝いていた。

「……王よ、僕は何をすればいいのですか。勇者とは、何を成す存在となればいいのでしょうか？」

覚悟と決意をこめて彼は問う。ここからの王の言葉が、彼のここからの全てを決めるのだ。

「おお、勇者の業を引き受けてくれるのか！ 勇者として成すこととはまず魔王の討伐」

肥満体を揺すり、王が語る。彼はじつとその声を聞いていた。

「我ら王家に忠誠を近い、民の希望と明日を護るため戦う、それが勇者だ。……もちろんゆくゆくは、君も王族の一人として加わる道も考えている……姫の婿としてな。その時は大切にしてくれたまえよ？」

横を向く王の視線、頬を赤らめる姫。

「……それが、勇者として成す全てですか？」

今の内に、全てをしつかりと聞いておかねばならない。

「ああ、これが全てだとも！ では早速魔王討伐のための支度を……」

「空は」

王の声を遮る。これが最後の質問だ。

「この世界の空は、青いのでしょうか？」

「ん、……ああ、空が見たいのか、勇者殿よ。さあ姫よ、彼を中庭へ案内してあげなさい」

王にうながされ、少女が立ち上がる。立つと細い体がより細く見えた。白魚のような長く白い、美しい指先が彼へ伸びる。

「さあ、こちらへ勇者様。今日はとても晴れた空なのですよ」

「……そう、なのですか」

勇者はゆっくりと、立ち上がった。

——まさか本当にやるとは……！

戦士長、オウタは駿馬を走らせる。

追従する馬は部下十二名。

林の街道を抜け、ただひたすらに王城を目指していた。

——勇者召喚、そんなことが……

魔王軍とは現在膠着状態にある。まともにぶつかれば魔王軍が優

位だが、犠牲を考慮すれば魔王はそれは選択しないだろう。

そもその戦争の発端は異人種を迫害する王国側と、異人種を纏める魔王との対立にある。民族紛争である以上、最終的な決着は利害ではなく、どちらかの消滅か国交を断ち互いに無視をするしかない。

オウタは異人種に対し差別感情は無い。戦場において、人と異人種に大して差は無いとわかったからだ。

だが王は違った。王には異人種とは排除すべき獣としか見えていなかった。

故に、選択は排除しかなく、その度合いも加減は無い。

『勇者を召喚し、魔王を討つ。三百年前に使われた方法をもう一度試すのだ』

二月前、突如王はオウタにそう言った。

歴史書の記述によれば、確かに三百年前に勇者を召喚、外敵の撃退に成功したと記されている。

だが、もう一度それを繰り返すということは終わり方も同じということだ。

召喚された最初の勇者は、善良な男だったという。当時の王や民の声を聞き、戦うことを承諾、見事に勝利した。

そして、役目を終えた勇者は邪魔者として暗殺されたのだ。

オウタとしては、別に使い捨てにされた勇者に同情する気はない。だが今回の召喚で、前回と同じタイプの勇者が来るという保証は無かった。

何か犯罪者に近い人間が召喚されれば、強化された勇者の力はそのまま脅威になる。オウタはそれを危惧したが、王はそれを軽視していた。魔術には悪心を持たぬ者を召喚するよう設定されている事、前回の成功が根拠だった。

——王は召喚を甘く見すぎている。

王は良き意味でも悪い意味でも王族だった。責としての王権を振るうことを厭わず、決断を進める。そして王として末端や下々の事には認識が甘い。恐らくは可愛がられている娘もそれに輪をかけたものだろう。

それでも、今までは問題なかった。

この程度なら、近隣諸国の王族と比べても普通の認識だ。

——だが今回は、今回だけはどうにも胸騒ぎがする……

オウタは齡十六にて剣を持って王に仕え、以後二十年間、兵士として一線に身を置き功績を立て続けた剛の者である。その戦士として自らを生かし続けた直感と経験測が胸の奥で叫んでいた。——

——危機である、と。

駆け抜ける街道には、輝くような新緑が栄え、彼の予感とはまるで無縁な、突き抜けるような雲一つ無き青空があった。

余りにも汚れの無い何かに遭遇した時、人はいい知れぬ不安を抱く。透き通るほど純粋な存在に、心が耐えられないからだ。

オウタがこれから遭遇する存在は、純粹過ぎるが故に、人の理解を超えた怪物である。

そしてオウタは知るだろう、この世でもっとも恐ろしいものとは理解できぬ存在ではなく、理解されることを求めぬ存在だということ。

——な、んだ、これは……

郊外にある王城、到着したオウタ達が見たものは地獄の光景だった。

削られ、破壊された壁や床、儀式で撒かれる聖水のように散乱する血液と骨混じる肉塊。それが城で働いてうた人員の成れの果てだと理解するのに時間がかかった。

——何を、召喚した……ッッ！？

すぐさま部下に散開を指示、生存者の搜索に当たらせる。まずは王の生存を確認をしなければならない。どれほどに絶望的でも、王政が国の起点である以上、それだけはしなければ。

侵入した大広間で、オウタはそれを発見した。

王と来客が晚餐を取る巨大なテーブル、その中央に肉の芋虫が転がる。

両肘、両膝から先は無い。切断部には火傷後、恐らくは止血によりショック死を防ぐため。

全身には切り傷、致命傷を避けた、浅い傷跡。両の目は切り裂かれ、血と水晶体が見えた。

局部に突き立てられるは、精緻なる細工がされた燭台、侮辱と陵辱の証。

破壊が激しく、顔の判別はつかない。長い金髪は引きちぎられ、血に染まっていた。胴体から、女性であることはわかる。口元には数本の切断された指が押し込まれていた。明らかに男とわかる太い指には菱形の豪華な指輪が装着されている。

オウタには、その肉塊と指の持ち主、それぞれが即座に思い当たった。

——姫と、王の指……ッッ

かつて麗しい少女だった、その面影さえない肉塊の芋虫。その周りには血が撒き散らされ、薄い胸には短剣が突き立てられていた。この心臓を突いた短剣が、致命傷となった。

心臓を貫いて派手な出血が発生する。それはつまり、この拷問が終わるまで、姫は死ねなかったというおぞましい事実を意味する。

——これを、やったのか、勇者がッ！？

喉が震え、身が凍える。同時に脳裏に浮かぶ疑問——なぜ勇者がそれをする必要があるのだ？

王は少なくとも勇者を懐柔するつもりでいた。高圧的に接しようとは思わないはずだ。そもそも勇者はこの世界に対する知識が無い。最悪、王の思惑がバレたとしても、わけがわからない環境である以上、普通は逃げるか言うことを聞く。

ここまでする必要など、無い。

——召喚は悪心を持たぬものと設定されているはず、極端に凶暴な者や制御しがたい者は呼び出されない……はずだ。

自信が持てない。魔術設定構築理論はオウタには専門外である。ただ一つ言えることは、拷問を行った勇者らしき存在が、城にいる可能性がある。

すぐさま呼び笛を鳴らす。鳥声のような高い音が、残骸だらけの城中に反響。さ迷う生者達を呼びよせる。

——……来るか、勇者は？

勇者が来れば集合する部下で挟み撃ちが出来る。この場で倒す、最悪でも勇者の情報を持って帰らねばならない。

——勝てるか……？

剣において、国では自らと並ぶ者無しとオウタは自負している。十二名の部下もまた相応の手練れ。魔王に打ち勝つ勇者と言えど、多少は持つはず。

ピチャリ。

響く水音に、身が跳ねる。足音だ。

ピチャリ。

——部下ではないな

室内戦闘で、相手の所在がわからぬ内から移動音を出すなどという愚行を部下達がするわけが無い。ということは、生存者が勇者の二択。

ピチャリ。

——構わん。

確かめずに、斬ると決めた。迷う時間が惜しい。王の生存が絶望的な以上、誰が生きていようと同じことだ。

やがて、ロウソクで照らされる薄暗い廊下、死者と残骸が舞い散る道よりそれは姿を表した。

身長は高め、オウタと同じ程度。瘦身で穏やかな雰囲気の若い男だ。

面長で、柔和な顔は街にいるような平凡な若者にしか見えない。その全身を滴る血の赤に染め、王の生首を携えていなければ。

「……お前が、勇者か？」

問いかげに、男は応えない。王の首は驚愕と恐怖の表情に固まっていた。まぶたの肉がむしり取られ、二度と目を瞑れぬようにされている。その様は、死して後の安寧すら許されぬ。

そして、オウタは気づく。勇者が血に濡れている事、血が固まっ
ていないという事実。つまり、あの血は新しい。そして、右手に
持つ長剣は部下の物だ。

「十二人、いた。あなたの仲間か」

オウタは、部下が全て死んだ事を知った。

肉塊

「なぜ、人を殺すッ！　なぜ王や姫を拷問したッ！　答えろ、勇者ッ！」

喉を枯らして叫ぶ。叫ばずにはいられない。この異常に、耐えきれない。

「あなたの年齢はいくつですか？」

——……あ？

質問が成立しない。

「あなたの年齢は、いくつですか？」

繰り返される問い。答えるべきか否か。

「……三十六だ」

「偶数、ですか」

男の目が、オウタを見る。敵意が無い、邪気も無い、ただ何も感じさせない虚無の黒目。

「ならば答えます。ですが答えるためには僕についての事を話さねばなりません」

左手が下りる。王の首が落下、床に鈍い音を立てて転がる。口内

から転がる白くて細長い数本の何か。

「僕は、基本的に大抵の事は出来る人間でした。教えられた事はすぐに覚えられるし、勉強も特に苦もなくこなす、いわゆる優秀な方の部類な子供だったと思います」

男は、淡々と過去を口走る。だが彼の目に郷愁は見えない。以前変わらず、虚無しかない。

「だけど、ある時気づいたんです。僕は『これをやれ』と言われるば、それをする事ができますが、僕自身から『これをしたい』という欲求が湧かないのです」

左足が王の頭に乗った。

「昔僕を診察した医者が言うには、僕の脳には通常の人の脳と比べて器質的变化があるそうです。そのため自分からの欲求が制限されているのだと言われました。人に対する認識が極端に薄いのも、それが原因だそうです。——僕は人を背景の絵の様に感じるのですが、他の人はどのように思うのでしょうか？」

誰かにやれと言われれば、どんなことでも出来るのに、僕自身がやりたいと思うことが何も無いのです」

感情も無く、話し続ける勇者。しかし左足には確実に力がこもっていく。

「僕は悩みました。これでは僕は僕の意志ではなく、誰かの意志で動く人形ではないですか？」

僕の意志は、どこにあるのですか？」

自らの意志を外部に示すために行動を取らねばならないのなら、行

動を取れない僕は意志が無いということになる。

ならば、そう考えるこの僕の意志は一体なんなのか、行動の欲求が無くても、自己の意志を示すためにはどうすればいいのか、ずっと考えました。これが僕の持てた唯一にして最後の欲求です」

この男は、意志を持つてしまった虚無だ。何も無い、それでも意志を示そうとする、それ故に周り全てを吸い込む。

吸い込んでも、吸い込んでも、己という空洞を埋められない。空洞こそが、己自身なのだから。

「だから僕はこう考えました。『人の欲求を叶えることしかできないのなら、どう叶えるかで自分の意志を示す』と」

——…どう、叶えるか？

自らの欲求が無いなら、一体だれがこの地獄を勇者に求めたのか？

「人に頼られた時、それを叶えるか、あるいは逆を成すか、それを目の前の偶然性の二択に委ねる、そう決めました」

「——ッなッッ!？」

耳を疑う。この勇者は何を選択した？

「僕の元いた世界で、僕を頼る人全てにその方法を用いました。

石を投げ、それが右に落ちたので求められるまま人を助け、左に落ちたら無惨に殺す。

不意に見た時間が偶数だったら求められるまま人を救い、奇数だったら奈落へ突き落とす。

その場で偶然の二択を決め、それに従い希望を叶えるか真逆を成す。

それをし続けて、気がつけば法廷で死刑判決を受けていました。最も、その日の裁判官のネクタイが赤色だったので判決には従わないことにしましたが」

最悪だ。もはや犯罪者がどうのではない、最悪の相手を召喚してしまった。

たしかにこの男に悪心は無い。だがそれ以外の全てもない。

悪意も害意も殺意も無く、ただ決められた事として人を殺す、もはや怪物ですらない。

「あなたに全てを話すのも、別に話したいからとか目的があるからとかではなくて、年齢が奇数なら話さず殺す、偶数なら話すと決めていただけのことなんです。ただ、それだけなんですよ」

粘着質な音を立て、王の首が踏み碎かれる。散らばる脳髓、眼球、骨片、髪、白い指。

——……指？

見覚えのある細い指が、口の中に詰め込まれていた。さつきも床にこぼれていたのを見た。

——姫の……指か……ッ！

「僕が最初にこの王様に言われた事は、『我ら王家に忠誠を近い、民の希望と明日を護るため戦う、それが勇者だ』という内容でした。そして僕は『この世界の空に僅かでも雲が浮いていれば願いを聞く。雲一つ無く美しい晴天なら真逆を成す』そう決めました」

オウタは即座に理解した。なぜこの地獄を勇者が作ったのか。な

ぜ勇者が王族を拷問したのか。

今日の空は、余りにも透き通って、綺麗だった。
それ故に、この国は滅ぶ。

「そして空が美しかったから僕は僕のルールに従ったのです。

『民の希望と明日を護るため戦う』の逆として、国民である城の人間を勇者の力で全員殺しました。魔法による強化とは本当にすごいものですね、少々驚きましたよ。

『我ら王家に忠誠を』の逆として、王の前で姫を拷問しました。

姫の口には王の指を押し込み、向こう側で身につけた素人の医療知識で延命しながら切り刻み続けました。

王が舌を嚙もうとしたので、姫の指を口に押し込み、まぶたを千切って姫が拷問されて死ぬ様子を最後まで見てもらいました。

残酷で酷いこととは思いますが、決めたことなので最後までやり遂げようと思います」

何も無い、何も無い、何も無い、狂気も悪意も善意も憐憫も慈悲も自己愛も本能も、人として必要な全てが欠けた空洞が、それでもなお意志を示すため吠えている。

そしてこの国は、この吠え狂う虚無に滅ぼされるだろう。

「——最後までやり遂げる、とは？」

「城の外の全ての国民を皆殺しにします。あなたを含めてです」

——やはり、か。

すでもうこの地獄は、止められない。

不意に父母の顔が浮かぶ。オウタがここで死んだ後、やはり勇者に殺されるだろう。現実感の無い、しかし染み込むような絶望の中、

家庭を築いていなかったのは僅かに幸いだと思った。

すでにオウタには騎士の誇りは無い。王を守れず、そして今国が滅ぶ間際でそんな物は消えていた。

だがせめて、世界に対しての禍根は断ちたいと思った。

こんな他世界などから来たものに、国どころか世界ごと滅ぼされるのだけは我慢ならない。

それがこの世界で生きてきた、騎士ではなく一人の人間としてのオウタ・イセジンの意地だ。

「勇者よ、この国を滅ぼすことがすでに定められた事ならば、滅ぼした後、貴様はどうするんだ？」

「その後は……決めてはいないな、特に願うものもいなかったし」

その先はまだまつさらなままだ。ならば、いけるはずだ。

「なら俺の願いを聞いてみないか？」

「願い？ あなたの？ 悪いがあなたの死は決まっています。助けることはできませんよ」

「……そんな願いじゃないさ」

自殺させる選択肢も浮かぶが、魔法により強化されている以上、正直勇者がともに死ねる体なのかさえ怪しい。下手をすれば自殺しない可能性もあり、確実性に欠ける。

ならばこの男に全て押し付けてしまおう。何も無い空洞なら、この世界の歪みを、全て飲み込んでいけ、誰よりも純粹で呪われた勇者よ。

「本当の勇者になるのさ、あらゆる理不尽を正し、弱き者を救い、世界から悲劇を取り除く、国を救うんじゃない、この世界で生きる人々を救う真の勇者に」

遠い昔、子供の頃に憧れていた騎士の物語。そんなものは夢物語だと、気がつけば諦めていた。

そして、なぜか今度はその夢を自分を殺そうとしている勇者に押し付けている。

自分でもわけがわからない。だがなぜかそうせずにはいられなかった。

「抽象的、過ぎるな。……だが出来るだろう、しかし偶然性からの二択で逆が出れば」

「なら案がある」

オウタが懷から取り出したのは、一枚の古い銀貨。

「コイントスで決めるのさ」

銀貨が宙を舞う。複雑に多重円回転しながら、シンプルな起動で飛び、オウタの手へ落ちていく。

パンツと小気味よい音と共に、右手がコインを抑えた。

「お前が当てたら、逆でいい。外したらそのまま叶えろ」

この世界に来たばかりの勇者にとって、銀貨の表裏の正否などわかるわけがない。

「待ってください、どちらが裏でどちらが表なのか僕は……」

「表か、裏か」

だが、もし勇者が本質的に求めているものが『偶然性による選択』ではなく、『自らがやるべきことの具体的指針の材料』であるならば、公正な偶然性などただの飾りに過ぎない。

「僕は……」

「表か、裏かッ！ 答えろよ、勇者ッ！」

目の前にある自分の役割に、

「——表、だ」

喰らいつくただ、例えそれが死に至る毒であっても。

「……残念、裏だな。これでお前は国を滅ぼした後、本当の勇者をやってもらおうか？」

勇者は、すでに銀貨を確かめることさえしなかった。

「さあ、勇者。後の事が決まった以上、ちゃっちやと話を進めよう。もつとも、俺もただで終わらせる気はないがね」

抜刀、勇者へ構える。後の憂いが消えても、やはり生きることが諦める気にはなれなかった。

「いくぞ、虚^{こころ}の勇者よ！」

叫び、踏み込む。加速と同時に流れるように、剣を振るう。

その一撃は、オウタの生涯の中で、最高の斬撃だった。
だが勇者が無造作に剣を振った瞬間、神速の両腕が爆ぜる。剣が
舞い、天井へ突き刺さった。赤の肉片、白の骨片が咲いた。

——あ、あ……

美しいと、思った。ただ純粹なまでの暴虐の力そのものが、余り
にも美しかった。この力が国を滅ぼし、世界を救うだろう。

思考の刹那、放たれる勇者の刃がオウタの頭蓋を貫く。

オウタの意識は闇へ霧散し——彼の意識を構成する脳組織が
床にぶちまけられ、機能を終えた。

国が一つ消えたという。

王制、が消えたではなく。

領土、を失ったのではなく。

国を構成する全ての人々がたった一人に殺されたという。

だが消えた国の領土は周辺の国に即座に分割統治され、わずかな
うちに混乱は収束していった。

どれほどの悲劇でも、世界は回り続ける。個人の悲しみや怒りな
ど、無視されるだけだ。

それ故に、世界の片隅に勇者が一人現れたことなどに気づくもの
はいなかった。

今は、まだ。

肉塊（後書き）

ぬるくない勇者を書いたつもりが、ただの異常者になってしまった

……

ちなみにオウタ・イセジンの名前の由来は

オウタ・イセジン↓オワタ・ジンセイ↓人生＼（＾Ｏ＾）ノオワタ
つまり名前から死亡フラグだったんだよッ！！（A A 略

ではお気軽に苦情と感想と指摘をどうぞ。

泥

血肉が跳ねた。皮鎧が割れて散る。骨が砕け、人の形が歪む。叫びさえ、上げられない。

わずか十時間前、蒸留酒を飲み、赤ら顔を浮かべて、ゲスな会話をしていた仲間の一人——禿頭の髭男、それが瞬く間に挽き肉となり、宙を舞う。

その肉と臓物の雨を浴びながら、山中で武力による強制徴収を生業とする職業——山賊の頭目は驚愕で声が出ない。

獲物として目をつけたのは旅人の青年。黒髪に黒目、育ちの良さそうな顔つきから金目の物があると予想。それなりの見た目から奴隷にも売れると値踏み——禿頭の髭男は性的な意味で青年を求めたいた。

簡単な仕事だったはずだ。こちらは五人、あちらは一人。

すぐに済む仕事だったはずだ。青年は剣を持っている、こちらは全員持っている。

楽しめる仕事だったはずだ。いつだって、何も知らない者を地獄へつき落とすのは楽しくて仕方ない。

だがそれは仕事ですらなくなった。忘れていた濃厚な恐怖と死の臭いが脳を突き刺す。

——ッひ、

叫ぶより早く、右側の仲間の一人——新入り、たしか傭兵崩れの男が消える。次の瞬間、赤黒い肉塊が泥を跳ねながら地面をバウンドしていた。

——な、ん、だ、……？

理解できない。青年が、素人の様に剣を持つ腕を振った直後、人が肉塊に変わっていく。

長身だが瘦躯の青年、彼の握る剣が輝く。魔術の類いではない、剣術でさえない純粹なただの腕力だ。

もう一人、人が消え、もう一個、肉塊が増えた。既に個人の判別などどうでもいい。

更に一人、人が崩れた。肉塊が完成した。それを知るより早く、跳ねた。その場より逃走する。

——じよ、冗、談じゃ……ぐっ！

首の後ろを直接掴まれた。痛みにも身が硬直する。背後から、感情の無い声が響く。

「僕は世界を良くしたいのです」

「グ、が、あつ！」

もがく、だが振り払えない。持ち上げられて、足が宙を蹴る。

「良くするにはやり方が二つあります。悪い部分を治すか、切除するからです」

ミチリと、青年の指が皮膚を破る。

「だから僕は決めتانです。『女に話かけられたら、前者、男に話かけられたら、後者を選ぶ』と」

指が筋肉にズブズブと沈む。

「グ、グ、ガアアアッ！」

絶叫、だが指は止まらない。やがて、中心を掴む。

「ありがとうございます。あなた達のおかげで、僕は決断ができた。本当にありがとうございます」

和やかな、礼の言葉。頸椎を掴む指に更に力がこもる。男はもう声を上げられない。失禁と脱糞、臭気が舞うが、青年に態度の変更は見えない。

理由を聞かれたならば、「そんなことをしても、人の価値は変わらない」そう青年はいうだろう。

最初から無価値な物の価値が、その程度でどう変わるといふのだ。

やがて腕が引き延ばされる。ブチブチという肉、腱が千切れる音、ボキボキと折れる骨、溢れ舞う血。

男から、ズルリと背骨が引きずり出された。ぐにやりと骨を抜かれた体が崩れる。

曇天の空の下、骨柱をしげしげと掲げる。

「——失敗したなあ」

もはや聞く者がいない、山中の泥地で呟く。脊椎を垂らした背骨は、半ばで千切れていた。

「綺麗に最後まで抜けなかったよ——」

小屋

——悪い物を取れば、あとは良いものが残る。

踏みしめる落ち葉、かき分けるは獣道。鬱蒼とした湿った土の臭い。曇天の薄暗い森を、勇者は歩く。

——そうすれば、あの剣士の人がいうように、僕は「真の勇者」になれるだろうか？

自らが惨殺した男を思い出す。不条理を砕けと、弱者を守れと、世界を救えと、最後に言い残した。

架せられたものの重さなど勇者は知らない。ただそれにいかに成すか、それだけが課題だ。いかにせよ、最初の願いは果たした。真逆という結果だが。

——魔法って便利なんだなあ。

魔法の使い方は知らなかったが、必要な素養はあったらしい。国を滅ぼす作業の最中、魔術が使える兵士達と戦った。

最初は手こずったが、相手の魔術を見て覚えられることに気づいてからは、一方的に勝てた。

ものの覚えが いいのが役に立ったのか、それともこれも勇者の強化された力の一部なのか、とにかく今では治療や攻撃魔術は一通り使える。

——魔法が使えないと、全員殺すのはもっと時間がかかったらうなあ。

国の規模はそこそこあったが、国民に対し奴隷の人数は約二割。あらかじめ調べたところ、奴隷は国民では無いそうなので、殺害からは除外。途中から魔法を使い始めて、目的完了までは飲まず食わずで人を殺し続け、二週間かかった。

——城の殺した人員に、奴隷は居たろうか……

知らなかったとはいえ、悪いことをした。国民でなく物扱いなら殺す必要は無かっただろう。

だが、それもすべて一週間前に完了した。今はあの剣士の男との約束を果たさねばならない。

善も、悪も男には理解できない。

魂は叫ばず、心は動かず、ただその脳が、常人には歩めぬ道と出来ぬ方法を模索する。

やがて、森の中で足が止まった。

——小屋、か。

板壁を這う蔦、割れた屋根。やや朽ち果てた山小屋が目の前に現れた。

食料は、先ほど山賊から奪った物がある。今日の寝床はここにするか。

男は静かに、小屋の中へ足を踏み入れた。

予想通り、小屋の中は荒れ果てていた。だが、

——人が、いた？

わずかに外気温より室温が高い。

魔術により照明を灯す。真っ暗な部屋が照らされる。

暖炉には燃えかす、水をかけられた後。触るとわずかに熱を感じる。

テーブル、ベッド、毛羽立った毛布、狭い部屋に簡素かつ粗末な家具。

ふと、ベッドの下を見る。ボロボロの服らしき裾がはみ出していた。わずかに動く。

——……いる、のか？

しばし、沈黙。

しゃがむと男は、やはり無表情にベッドの下へ腕を突っ込んだ。

「わっ！　ちょ、ひい！」

声が聞こえる。細い足に顔を蹴られながらも、なんとか首根っこを掴んで引きずりだす。

「いや、いやあ！」

思いの他体重が軽い。魔術照明の下、隠れていた者を掲げ、しげしげと見つめた。

彼のいた現代日本、その同年代よりも細い骨格、長いというより手入れされていない赤髪、ボロボロの粗末な服。顔にはあざ、暴行の痕。

華奢な腕で、必死に顔を守る。

「やめて！ 下ろして、何もないよ！ お金も食べ物も何も無いよ、殴らないで！」

まだあどけない、しかしひどく怯えた十才ほどの少女だ。
そして、男は少女の首筋のある物に気づく。

正三角形の焼き印の傷痕、それは少女が人ではない存在、物であることを示す。

「——— 奴隷、か？」

無表情に、男は呟いた。

治療

魔術による光球が部屋を照らす。その光を浴びながら、細い体がかく。

「痛い、下ろして！ 下ろしてって！ 助けて！」

じたばたと足をふる少女、ゆっくりと下ろす。

「——ここには君一人なのですか？」

今にも泣きそうな少女が、恐怖の視線で男を見上げる。

「う、うん、ここにはあたし一人しか……あ、あの」

「何か？」

「鼻……鼻血、出てる……」

勇者の端正な顔、その鼻下から一筋の赤。先ほど少女に蹴られたからだ。

「問題はありません」

即座に血が止まる。パリパリと血が乾燥、皮膚から剥がれ落ちた。魔術による自動高速治癒だ。

「……魔法使いの人？」

「質問に答えてもらいたいのですが、あなたはなぜこんなところにいるのですか？ 保護者はどこに？」

怯えながら、少女は口を開く。その表情には、痛みが満ちていた。

「……隣の国が無くなったの、知ってる？」

「ええ、存じています」

滅ぼしたのは、他ならぬ彼だ。

「あたしは、その国の貴族の奴隷だった。父さんと母さんも奴隷で、貴族の鉱山で働きながら生きてた」

鉱山奴隷、奴隷の中では特に過酷な種類だ。

「あたしは体が小さかったから、鉱山で削った石を穴を通して運ぶ係だった。奴隷だから、ずっとそうやって生きるしかないって思ってた」

奴隷であれば、生き方はほぼ一本道だ。もしこの娘が器量良く育てば、娼館の道程度はあったかもしれない。

「でもある時、国の人間を誰かが片っ端から殺されているって噂が流れた。この国の『人間』を皆殺しにするまで止まらないってみんな怖がってた。

でも、『人間』じゃないから、奴隷は殺されないらしいって噂もあった」

「『人間』じゃないから……？」

彼の意図とは少し違う。彼は奴隷が『国民』ではないから殺害から外した。断じて『人間』外扱いしたのではない。

「それから、奴隷全員で鉦山から逃げ出そうって話になった。貴族はそっちに大忙しだったし、……主人は酷いやつだったから、みんなキライだった。

悪いことをしていなくても鞭を打たれるし、見せしめに処刑される人だっていたから」

少女のいた環境は、地獄だった。

「でも逃げ出す途中、貴族の兵士が来て、みんな散り散りになった。父さんは、その時に死んじゃった……」

顔が沈む。幼い瞳の中に、血溜まりに倒れた父親の姿が浮かんだ。

「母さんと国境を越えた山小屋、ここに逃げたんだ。でも、母さんも……元々肺が悪かったからすぐに病気で死んじゃって……」

細い肩が、震える。少女にはこうして落ち着いて話ができる相手自体が久しぶりだ。

「うえ……一人で、暮らしてたら、昨日、ご、五人組の、山賊がやってきて、ひつく……殴られて、た、食べ物盗られて」

徐々に泣き声が混じる。打撲痕は勇者がつい先ほど殺戮した男達につけられたものだろう。

「あたしを踏みながら、あ、あいつら、嗤いながら、あたしに『奴

隷は踏まれて死んでいけ』って……えつく、な、なんであたし、奴隷なんだろ……なんで、父さんも母さんも人間に生まれなかったんだろ……う、うう」

すでに泣くしか少女にはできなかった。無力な子供には、抗うことさえ許されぬ不条理と、世界の残酷さが彼女を叩き潰していく。

「……奴隷とは、人ではないのですか？」

「ど、奴隷は人じゃないって、みんな言ってるよ……」

「では奴隷であることの条件とは？」

男の言葉に、少女は一瞬驚く。泣き声が止んだ。

「え、だってうちはずっとずっと奴隷の家系で……」

「奴隷ではなかった先祖だっているでしょう。戦争などで奴隷の身分になったのなら、それ以前は違うことになる」

「だって、奴隷は人間じゃないんだよ……」

「僕には、君が人間にしか見えません。君が奴隷だというのは世界のどの人間なのですか？」

どの人間が否定すれば、君は人間で、どの人間が肯定すれば、君は奴隷なのですか？」

「に、人間、あたしが？ え、え、」

初めて、他人から人間だと認められた。家具として、所有物とし

て扱われ続け、家族以外の人間から、初めて人だと言われた。
それは、少女の中で最大の驚きだった。

「だって、あたし奴隷だから、人じゃないから……」

「自分が『誰』かを決めるのは、他人ではなく自分自信なんですよ。
例え世界中に否定されても、君は君のなりたい物にならなくてはいけません」

「だって！ それでも、あたしは奴隷なんだ、この焼き印を入れられた日から、あたしは……」

不意に男が片膝をついた。しゃがむ勇者の左手が、少女の右手首を掴む。右手は顔の打撲痕へ。

「な、なに？」

「動かないで」

柔らかな青い燐光、ジワリと手の当たる所に優しくな熱。治療魔術だ。

「……治ってる」

男が手を離すと、右手のアザがきれいに消えていた。おそらくは顔のそれも消えているだろう。

そして、右手が首筋、焼き印に当てられる。再び燐光が灯った。

「……この傷が君を奴隷にしているなら、無くせばいい。それでもなお、奴隷でいたいなら、好きにすればいいでしょう。」

でもほんの少しでも『奴隷でいたくない』と思うなら」

手が離れる。少女には、見なくても傷が消えていることがわかった。

「君は自分の意志で『人』でいるべきなんです」

「……あ、ああ、あ、」

再び、嗚咽が漏れる。だがそれは残酷への嘆きではなく、再び『人』として生まれたことの喜びの産声。『人でありたい』、涙と共に、少女は生まれて初めて強くそう願えた。

「あ、ありがとう、お兄さん。あたしはミトスっていうんだ……お兄さんの名前は……？」

「僕は、ソウジ。カゲイ・ソウジといいます」

表情を変えず、質問を返す。

勇者は、初めてこの世界の人に名乗った。

脅威

「それでは、今回の『虐殺^{ジェノサイド}』、我が隣国のノル王国民全員殺害及び王国崩壊事件の三ヶ国協同による第一時調査班結果報告のまとめを説明しよう」

紙巻きタバコの匂いがこもる薄暗い部屋、作戦室にて、白髭の軍人が口を開く。

年齢は五十代、堂々とした体躯、年季の入った軍服に飾られた勲章。そして、左顔面のこめかみからアゴヒゲまでを縦に横断する戦傷。それはまるで、鍛え込まれ、使い込まれた折れぬ鉄塊を想起させる男だった。

「まず事件の開始は、恐らく三週間前。ノル王城にて最初の虐殺が発生したと推測される。これは場内の死体の状態から算出した。各員、事前に配った資料を見てくれ」

広大な会議用テーブルにならぶ様々な人影が、いつせいに手にもった紙の束をめくる、静寂の部屋に、紙ずれの音が響く。白髭の軍人、《鉄砂》のロベック・グドロ第三騎士団団長はそこへ懐から取り出した代物を投げた。

転々と軽やかに転がるそれは、例えるならダイス、全ての面に記号化された『眼』のモールドが刻みこまれた真鍮製の正六面体だ。

「一つ、聞き忘れたが、」

テーブルの中央で停止、天を向いた面から、光が伸びる。空間に、映像記録魔術具による再生映像が映し出された。

「皆、昼食は済ませた後だろうか？

まあ、訓練された身なら多少の事は大丈夫とは思うが。

いまさらだが総員、覚悟したまえ。——これは視覚化された地獄だ」

テーブルを囲む総勢十六名——第三騎士団、分隊長十五名と団長に粘つくような緊張が漂う。展開される映像から、僅かな情報の残滓さえ残さぬよう目を見張る。

最初に映し出された映像は、黒だった。やがて映像が動く、それは記録映像の不備ではなく、乾き変色した壁の血だと隊長達は気づいた。

さらに視点が動く。砕けた壁、避けた床、転がる肉塊、場所は王城内、本来ならば威厳を伝える装飾と内装に満ちたはずの室内は、ただ混沌と死に満ちていた。

視界の端などで動く白装束の人間が見える。白装束の正体は、対魔術毒物装備をした調査団の人員だ。

映像が切り替わる。薄暗い一室、光る塗料で床に描かれた魔法陣が見えた。

「虐殺の発生点である王宮、その地下室にて恐らくは『召喚』に使用したと見られる召喚陣などの道具が発見された」

団長の言葉に、ざわめきが広がる。本来ならば鍛え上げられた兵士達の筆頭者である各隊長に、隠せぬ動揺が見えた。

「精々、神話が伝承の類いとされてきた他世界からの召喚術式、だがノル国では歴史上それにより外敵を排除したと記録されている。今回も対魔王用に召喚を試みた、というのが調査団の現在の推測だ」

映像が切り替わる。再び、残虐な光景へ。

四肢が切断された腐乱死体、胸元に突き立てられたナイフ。

「王宮の虐殺の特徴は大きくわけて三つ、
一つはこの場所でのみ唯一、拷問が行われている。対象は王と娘である姫」

次に映されるのは、潰れた男の生首。そばに散らばるは女の指。

「本来、拷問とは情報の取得や憎悪を晴らすために行われる行為だ。つまり犯行者は王族になんらかの情報を聞きたい、もしくは恨みがあつたと考えるのが順当だが……
国民を皆殺しにするという狂気の前では、犯人内面の正確な推理はあまり意味をなさんだろうな」

呻き声が部屋のどこからか聞こえる。既に、この場にいる何人かが映像から見える虚無に吞まれかけていた。

「二つ目は、他の場所と比べて殺害方法は単純な腕力によるものばかりだということだ。

残留魔素の少なさから、大規模魔術の使用は確認されていない。城から離れた他の場所では大規模魔術の使用は確認されていた。
それにより、王宮での虐殺は他の場所に比べ非常に滞在時間が長かったと考えられる。

王宮以外ではスピーディに虐殺をしているにも関わらず、だ。

そして三つ目、王宮でのみ、国民ではなく奴隷で殺害された存在がいる」

奇妙なことに、虐殺者の行動に一貫性が無い。

奴隷を殺さないかと思えば、初期の段階で殺している。

強力な戦力を持ちながら、序盤でやたらもたついている。

まるで予備知識や準備無く、いきなり計画を開始したかのような

つまづき。

「まず虐殺者の人数が不明だ。

拷問の痕から、拷問に携わったのは恐らく一人。だが犯人が多人数なら一人だけ拷問に参加するのは不自然過ぎる。

そして、死体の状態から虐殺は王城を外から攻めて、ではなく城の中庭、つまり内部から開始されている。

ということは規模から考えれば、重装備の戦術級魔術師クラスを最低でも三十人は王宮内部に引き入れねばならない。王宮警備の観点から、そんな戦力を城内に入れる事自体有り得ない。

王宮での被害者以外の残留物、足跡は一人しか発見されていない。つまり」

喉の乾きに、傍らの杯に入った水を飲み干す。冷徹な推理の結果、表れるのは有り得ない怪物の足跡。

「つまり、——犯人人数が一人なら全て不自然さが解決出来る。だがおよそ一人の人間が成し得る所行では無い、ということだ」

室内の空気が乾き、凍る。この場の全ての人間が、今この世界に『理解を拒む何か』が存在する事を直感した。

朝（前書き）

『この最低の世界を創ったのは、
形而上学的な超越力じゃない。

子供を殺したのは神じゃないし、

その死体を犬に喰わせたのも運命なんかじゃない
俺たち人間だ 人間の仕業だ』

- ロールシャッハ -

朝

「……うう、ん」

鳥のさえずりと、壁の隙間から差し込む朝日で、ミトスは目を覚ました。

粗末なベッドと毛布、荒れ果てた部屋。普段と変わらぬ小屋の中で、一つだけ違うものに気づく。

「……あつた、かい」

小屋の中には、暖気が満ちていた。弓帝月、冬も近い今の季節では朝は身も凍るほど寒いはずだ。今までも、朝起きるたび震えながらミトスはマキに火を付けていた。

あの青年、ソウジの使う気温調節の魔術により、常に小屋の中に暖かい空気がある。初めて少女は寒さに身を凍えさせず目覚めることが出来た。

——あの人は、どこ……？

部屋を見渡す、誰もいない。昨日と同じ、がらんとした空間。

だがテーブルには木皿と木のさじが確かにある。夕べ、青年が作ってくれた穀物粥を口内を火傷させながら食べたのを思い出した。

「元は君の食料だから遠慮は入りません」そういいながら、やはり彼は無表情だった。

不意に、寒々しくなる。

——あの人、どこに行ったの……？

彼のいた痕跡は確かにある。だが彼が幻ではないかとも思う。それほどに、自分を人として扱ってくれたのはあのソウジだった。不安が胸を刺す。『ひよつとしたらもうここにはこないのではな
いか?』、そんな思いが湧く。

あの青年は笑わない、泣かない、怒らない。どこにでもいそうだがどこにもいないような無表情な男。そして、ミトスにとって初めて他人でありながら自分に優しくかった人だ。

「ソ、ソウジ！ ソウジどこなの！」

ベッドから立ち上がり、裸足のまま歩き出す。早く彼に会いたかった、居なくなつてほしくなかった。
ギシリ、とドアが軋む。そして開く。

朝の光を逆光にし、長身、だが細いシルエットが現れる。

「——僕に何か用でしょうか、ミトス？」

何か荷物を抱えたまま、笑いもせず、怒りもせず、カゲイ・ソウジはミトスへ声をかけた。

「ど、どこにいったの……?」

恐る恐る尋ねる。

「麓の村の市場までいつてきたんです。色々買つものが有りましたから」

粗末な布に包まれた荷物は、かなり大きいが、青年は苦もなく持ち上げている。

「食料や調味料、あとは毛布と服ですね。さあミトス、まずは」

荷物を床に下ろす。ミトスの肩に手を当てた。

「まずは風呂です」

「……では、この虐殺の実行者の分析結果を続ける。王宮を出てからの実行者の行動だが」

団長の声と共に、映像が切り替わる。場所は王宮近くの城下町。点々と散らばる赤黒いシミや塊。死亡してから放置された大量の死体だ。

「虐殺方が変わるのはいここからだ。王宮内では強化された肉体のみだったのが、ここからでは中位の攻撃魔術の使用が確認されている」

街の建物や石畳、それらについた焦げ痕や破砕痕。死体の状態も変化、焼死体や感電死した犠牲者もいる。

「街に進入してから、一般人を虐殺。その後、警護である魔術士や剣士などの軍人との戦闘を開始。戦い方が変わり、中位魔術を使用し始めるのはこの後だ」

明らかに奇妙。事前に何らかの策を仕掛けることなく、正面から街を襲い、軍と敵対している。

国を消すという狂気の行動、だがそれは狂気のみで出来ることではない。

それが実行され、成されたということは、なんらかの軍事知識を持って作戦立案がされたはずだ。そうでなければ、彼らは一体何を（・・・）相手にしているのか。

「そして、虐殺が終盤に向かうほど、実行者の魔術はより複雑かつ高度な物になっていく。

調査団の意見では、魔力に節約を狙い初期に大規模な魔術を使わなかったのでは？ という意見が主流だ。

……だがな、ここからは私の所見であり、あえて混乱を恐れずに正直に言うならば、
実行者は、『成長』している、私にはそう見えるのだ」

事実、行動の不自然さを成長と捉えようと、疑問が消える。単純に「虐殺をする」という目的から、徐々に方法を選択、より効率よく変化しているように見える。

「……団長、では実行者は知識も作戦も無く虐殺を開始し、なおかつ、たった一人だと……？」

隊長の一人の問いに、団長は凍った表情のまま頷いた。

「もちろんこれは私一人の考えであり、調査団の意向ではない。

というより、国全体という虐殺の範囲が広すぎて統合的な判断が未だはつきり出来ないのが現状だ。

一部の情報のみで全てを判断するのは危険である、だがいつまでも判断の保留が許される状況ではない以上、どこかで区切りをつけねばならない。

我ら国境警備を主任務とする第三騎士団の課題は、実行者を国内に

入れず、または即座に排除する。その一点だ」

声が会議室に響く。計り知れぬ怪物の予感が、兵士達の脳裏を貫いていく。

「では、団長。実行者が、その、……いわゆる、『勇者』であると思えますか？」

発言者——一番年若い隊長職の青年の発言に老兵は静かに答えた。

「……分析によれば、召喚魔法陣は動作した後だそうだ。成功していれば、勇者はこの世界に現れているだろう。」

そして、勇者らしき死体が発見されていない以上、実行者が勇者である可能性は十分にある。

しかし、我らの成すべき任務は『国防』だ。

そのために命をかけ敵を抹殺する覚悟が私にはある。その前には、勇者であるか、そうでないかは大した違いではないはずだ。それにな」

初めて、老兵が嗤う。それは、齒をむき出した肉食獣の笑み。

「他の世界から来た人間如きに、この世界でデカい面はなおさらさせたくはないだろう？」

兵士

柔らかな絨毯を踏みしめ、金髪の大男が歩く。巨体を包む軍服、腰に帯剣、その眼には、研ぎ澄まされた緊張。

ノルド地区警備部隊隊長、マクヤ・ガルズは東部軍庁の廊下を急いでいた。

——『三ヶ国共通による実行者の作戦上指定名は「コードネーム攪拌する者」に決定、なおノル国を滅ぼした者を、人と思ってはならない、しかし人の形を成していないとも考えてはならない』

胸中で、報告会を閉めた団長の言葉が反響する。肉塊を作り出す初期の殺害方法から、コードネームが決まったそうだが、はつきり言って趣味が悪すぎると思う。

——一体、何が現れたというのだ？

マクヤの担当する地区はノル国と隣接する国境部、つまり最も危険な場所だ。

現在とはともかく、ノル国崩壊が確認されるまで間、国境警備は特に強化されていない。

国交が万全な普段ならば問題はなかったろうが、今あちこちの国境線では難民化した奴隷の存在に苦慮している。ノル国は周辺四力国で最も奴隷の扱いが厳しかった。

故に脱走し、法律上奴隷の扱いがまだ軽いこちら側に『所有』を望む事態も珍しいことではない。

クルニス、かつて戦争により亡ぼされた国の人の子らは、人とは呼ばれず、そう呼ばれた。

——とにかく今は、奴隷の流入を抑え、国に入る人間を抑えるしかない……

侵入を禁止しても、国境際で奴隷達は溜まる。無駄な暴動を抑えるためにも、ある程度の食料支援や希望を含ませた予定の通達は必要だ。

現在実行者が奴隷の中に紛れ込んでいる可能性がある以上、各国とも下手な手出しは出来ない。混乱さえ上手く治まれば、難民奴隷は全て元ノル国へ戻らされるだろう。

もし暴動が発生したならば、最悪の場合、実行者ごと奴隷を消すという作戦に入る可能性もある。そうなれば、間違いなくマクヤ達の部隊も参加しなければならない。

——それだけは勘弁してくれよ……

いくら人と認められなくても、喋り、笑い、泣き、人の形をした物を人ではないとマクヤは思えない。

「マクヤ隊長」

聞き慣れた、澄んだ声に振り向く。視線の先には、軍服を着た女性がいた。

「……ウェイルー、なぜここに？」

短い金髪、縁無し of 伊達メガネ、細く、だが引き締まった肢体を持つ美貌の女軍人が険しい視線をマクヤに送る。

彼女はマクヤの部隊の副隊長にして、公私に渡るパートナー——つまり妻だ。

本来は隊長が不在なら副隊長が現場に詰めなければならないはず

だがなぜここへいるのか。

「言いたいことは解る。だがまずはこれを見てほしい、できればその後、団長に直接報告したい」

鼻先に突き出される書類の束、報告書だ。

普段のごとく冷静な口調で、彼女は告げた。

「山中にて死体が発見された。数は五体、恐らくは山賊の類。そして」

マクヤはその時、室内にいながらに風を感じた。

「死体は五体中、四体が挽き肉のように肉塊にされていたそうだ」

運命に吹き荒ぶ、死の風の気配を。

——初めてだなあ、お湯で体洗うなんて。それに石鹸なんて高級な物も初めて使った……

川のさざめきが聴こえる中、一糸まとわぬ姿で少女は湯の暖かみを満喫する。

場所は山中の河原、川から石をよけて水を引いた溜まりを作り、ソウジの魔術でお湯にすることで即席の湯船にしたのだ。

——不思議だったなあ、火も出していないのに川の水が温まるなんて……

ソウジが水に手をつけると、すぐにお湯になった。高出力マイク口波による水分子を振動させる魔術だが、正直ミトスにはどういう原理なのかよくわからない。

——デンシレンジデチンノゲンリって、呪文が何かかしら？

いきなり風呂と言われた時は何をさせられるか不安でならなかった。なにせ小屋には体を洗う設備が無い以上、川の水で身を清めるしか無いのだから。

石組みの湯船の側には、真新しい服と布が置いてある、ソウジが用意した物だ。

——あの人は、なんでこんなに優しいんだろう……

今更な疑問が湧く。少女にとって両親以外の大人は、いつだって自分を踏みつけ、痛めつける存在でしかなかった。奴隷に優しくした所で、得をする人間はいない。

不安はある、だが彼以外に頼れる者がいないのも現実。

——あたしは、あの人の物になるのかな……？

少女の心の奥で、まだ自分が奴隷であったという事実が振り払えない。気がつけば『所有される事』を考えている。

けれど、『この人に所有されたい』と考えるのは、彼女の人生で初めてのことだった。

ゴ
オ
ン
ッ
！

「——な、なにっ!？」

突如、森の奥で爆発音。空気振動がかける。
煙が上がる方向はソウジが向かっていった方角からだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7248z/>

その勇者、虚ろにつき

2012年1月10日03時45分発行